
メグタマ！

式部雪花々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メグタマ！

【Nコード】

N3046BA

【作者名】

式部雪花々

【あらすじ】

新人女性刑事の朝井環^{たまき}が初めて一人で逮捕したのはプロカメラマンの及川環^{めぐる}。

だが、これがまた誤認逮捕ときたからさあ大変！

メグルとタマキ、これが二人の奇妙な縁の始まりだった。

シリーズ1・誤認逮捕＋殺人事件Ⅱ腐れ縁の始まり？

シリーズ1・第一話

五月。

ゴールデンウィークも終わり、ようやくいつもの生活サイクルに戻った頃、

夜景がよく見える高台の公園に二人の男の姿があった。

「なーんか、周りがみんなカップルなのに野郎二人で夜景の撮影なんて、

仕事とはいえ虚しいっすねー」

一人は源五郎丸哉曾吉。

カメラマンの助手をしている二十五歳の若者だ。

本日の撮影ポイントに車を止め、運転席でばやいた哉曾吉は溜め息を吐いた。

「そんな愚痴言つてると余計虚しくなるぞ？」

そう助手席で苦笑いしたのはもう一人の男、おいかわ めぐる及川環、三十二歳。

哉曾吉の師匠でカメラマンの彼がこの物語の主人公の一人である。

「まあ、そうっすね」

哉曾吉はメグルと共に車から降りると、さっそく撮影の準備に取り掛かった。

そして、いざ撮影を始めようとメグルがカメラを構えたその時、

「ちょっと、あなた達！　そこで何をしているの！」

後ろから声を掛けられた。

いや、どちらかと言えば“怒鳴られた”感じではあるが。

メグルと哉曾吉が振り返ると、そこにはグレーのパンツスーツ姿の女性が腕組みで仁王立ちをしていた。

見たところ二十代前半だろうか。

「まさか、カップルを隠し撮りしているんじゃないでしょうね？」
ツカツカと大股で歩み寄って来る女性。

「アンタの方こそ何だよ？ 俺達はどこで夜景の撮影をしているだけだ」

短気な哉曾吉は彼女の物言いにカチンと来たようで、やや喧嘩腰になった。

「ゲン」

メグルはそんな哉曾吉を宥めながら女性の方に向き直った。

「公園の管理事務所の方ですか？」

「いいえ、こういう者よ」

女性はメグルの質問に答えるべく、ジャケットの内ポケットから警察手帳を出して二人に見せた。

あさい たまき
名前は朝井環。

二十歳の新人刑事で彼女がこの物語のもう一人の主人公である。

（俺と同じ名前？ いや、女の子だから“たまき”かな？）

「職質なら初めから警察手帳出しゃいいのに……」

ボソリと呟く哉曾吉。

「この辺りは最近、女性を狙った痴漢や隠し撮りが多発しているからパトロールをしていたところなの」

「そうですか。けど、俺達はちゃんと許可を得た上での撮影ですから」

メグルは公園の管理事務所が発行した撮影許可証をタマキに見せた。

「これ、本物でしょうね？」

しかし、どこまでも疑うタマキ。

「そんなにおかしいならその許可証に載ってる管理事務所の連絡先に問い合わせしてみたらどうですか？」

それでもメグルは哉曾吉とは対照的に淡々とした口調で言った。

「……」

その様子にタマキはやや眉間に皺を寄せ、撮影許可証をメグルに返した。

「わかったら、撮影の邪魔だから帰ってきてくれる？」

哉曾吉がムツとしたままの顔で言い放つ。

「……………」

すると、タマキは苦虫を噛み潰したような顔で踵を上げ、スタスタと歩いて行った。

「……ったく、なんなんすかねえ？ 今の」

哉曾吉は彼女の後姿を睨み付けながら吐き捨てるように言った。

「女だからって舐められなくて態と強い口調で言ったんだろ」

だが、メグルは特に気にしている様子もない。

「メグさんて“大人”っすね？」

「そう考えれば腹も立たないって事だよ。それより、ちゃっちゃんと撮影終わらせて帰ろうぜ」

「はいっ」

哉曾吉はビシッと敬礼して返事をする、メグルのサポートをするべく彼の傍らに駆け寄った。

その数日後　。

メグルが仕事帰りにある高級マンションの前を通り掛かると……、

（あれは……）

ただいま人気絶頂の俳優がこれまた超人気女性アイドルの肩を抱いてマンションに連れ込んでいた。

すぐさまいつも持ち歩いているコンパクトサイズのデジカメで撮るメグル。

周りには記者やカメラマンらしき人物はいない、この現場を押さえたのはどうやらメグルだけのようだ。

そうなると大スクープになる事だって有り得る。

メグルはデジカメに収めた画像を確認して踵を返すと足早に事務所向かって歩き始めた。

そして事務所まで後、数十メートルの所まで戻ったその時
！

「待ちなさい！」

後ろから声がして腕を捕まれた。

「え？」

メグルが足を止めて振り返る。

すると、そこには先日、丘の上の公園で会った女性刑事・朝井環が立っていた。

「またあなたなの？」

怪訝な顔をするタマキ。

（それはこっちの台詞なんだが……）

「あの、何ですか？」

「婦女暴行の現行犯であなたを逮捕します」

ガチャンと音を立てメグルの手首に嵌められる手錠。

「え？ ちょ……っ」

「言い訳は署の方でたっぷりと聞くわ」

「待てよ、一体何を根拠に……っ」

「目撃証言」

「はあっ？」

「被害者と目撃者の証言が一致しているの」

「何だよそれ？ 俺の言い分も聞かずにいきなり逮捕？」

「だから、言い訳なら署の方でゆっくり聞いてあげるわよ」

そう言いながらタマキは無理矢理メグルを車の後部座席に押し込め

た。

「……………」

メグルは今は何を言っても仕方がないと観念し、後ろに見える事務所を見つめながら軽く溜め息を吐いた。

（せっかくのスクープなのに……）

「朝井、容疑者を逮捕したって？」

警察署に入るとすぐに一人の男性刑事が駆け寄って来た。

「はい、この男です」

「思いつきり誤認逮捕ですけど」

メグルは二人に聞こえるように呟いた。

眉根を寄せるタマキと男性刑事。

「そんな事を言ってられるのも今のうちよ」

タマキはそう言うのと取調室のドアを大きく開けてメグルに中に入るよう顎で指示した。

「是永さん、お願いします」

メグルを椅子に座らせるとタマキは一緒に取調室に入った男性刑事・これなが たみお是永多美男に言った。

「今回は初めてお前一人で逮捕した容疑者だろ？ 取り調べもお前がやってみろ」

「え……、は、はいっ」

タマキは少し嬉しそうに返事をするとうすぐに再びキリッとした表情に戻り、メグルの向かい側に腰を下ろした。

「まず、あなたの名前と年齢を言いなさい」

「及川環、三十二歳」

「一応、偽名は言っていないようね」

メグルの荷物を全て取り上げた後、免許証から書き写したのか彼の名前や年齢、住所や連絡先までもが既に調書として

タマキとその横に立っている是永の手元にあった。

「それで？ 俺はいつどこでどんな風に女性に暴行を加えたと言
うんですか？」

メグルはやや不機嫌そうに口を開いた。

「それを今からこっちが訊くんでしょうが」

「いや……だから、俺は誤認逮捕で連れて来られたんだから、何を

訊かれたって答えられないですよ」

「まだそんな事を言ってるのっ」

「なら、逆に訊きますけどその目撃情報ってなんなんですか？ その人達が俺の顔を見て

『あの人です』って言ったんですか？」

「そんな事、容疑者のあなたに言える訳ないでしょっ！」

「朝井、落ち着けよ。これじゃまるで子供の喧嘩だぞ？」

見かねた是永が思わず制止に入る。

「……すみません」

「まず犯行があった時間、どこにいたのか訊いてみれば？」

先輩らしく的確な指示をする是永。

「はい」

タマキは返事をしてメグルの方に向き直った。

「今日の午後六時から七時頃、あなた、どこにいたの？」

「その時間でしたら……新宿である人物取材の為に張っていました」

「新宿？ 品川じゃなくて？」

「ええ、新宿です。証人もいますよ。仕事仲間ですけど」

「……ある人物って誰を張っていたの？」

「それは言えません」

「何故？」

「いくら取調べだとは言え、俺は無実ですから仕事上、秘密にしておきたい事まで話す必要はないからです」

「無実かどうかは私達警察が決める事よ」

「……………なるほど……………冤罪がなくなる訳ですね」

メグルはフツと軽く溜め息と共に本音を吐き出した。

「なんですってっ？」

パンツとデスクを両手で叩き、立ち上がるタマキ。

「俺は訳もわからず、あなたにいきなり手錠をかけられて連れて来られたんですよ？」

しかも罪状が『婦女暴行』なんて身に覚えのない事を……急ぎの仕事だってあるし、

その後、人と会う約束もしてるって言うのに」

そもそもメグルがあ的高级マンションの前を通り掛ったのも待ち合わせ場所に向かっていている途中だった。

しかし、思いがけずスクープが撮れた為、事務所に引き返していたのだ。

「それは残念ね。犯人のあなたは罪を認めなければこのまま拘束されるし、

認めたとしても拘置される事になるんだから、どちらにしても仕事も出来ないし、約束も破る事になるわ」

「あ、そ……もう話にならない……だったら、好きなだけ俺の事を調べればいいし、

ここに拘束しておけばいい。ただその代わり俺が無実だとわかった時はそれなりの責任を取って貰いますよ？」

「な、何よ……脅してるつもり？」

メグルの鋭い目つきに怯んだタマキ。

「別に」

「私に刑事を辞めろと言っても言っの？」

「そこまでは言っていないですよ。せっかく撮ったスクープが台無しになった時の損害賠償をして頂ければ」

メグルはそう言うともう何も喋りたくないという顔で黙り込んだ。
。

シリーズ1・第二話

それから一時間後、

「……」

メグルは黙秘を続け、

「ちよつとおー……このまま黙ってたって時間の無駄よ?。」

そんな彼にタマキは自白を促し続けていた。

タマキの後ろでは是永がじつと様子を窺っている。

そうしてまたしばらくすると、取調室のドアを少し荒っぽくノックする音が響き、

革ジャンにジーンズとラフな格好をしている一人の若い男性刑事・竹岡が入って来た。

「是永さん」

竹岡は是永に近寄り、何か耳打ちをした。

すると、是永の片眉がピクリと動いた。

そして竹岡が取調室から出て行くと、

「……及川さん、お帰り頂いて結構です。長時間お引止めして申し訳ございませんでした」

是永はメグルに丁重に頭を下げた。

「こ、是永さんっ、何を……っ？」

その行動に慌てるタマキ。

「朝井、お前の早とちりだ。及川さんは犯人じゃない。たった今、長原が犯人を逮捕した。」

被害者に面通しして確認もして貰ったから間違いないそうだ」

「でもっ、この男だって目撃証言とびつたり一致します!」

「だが、彼の面通しでの目撃者の反応は『違う気がする』と言って

いた。

それでも、まだはつきりとした事がわからないから俺も黙って様子を見ていたが……、

長原が逮捕した男は目撃証言、被害者の面通しの証言も揃っている」

「そんな……」

愕然とするタマキ。

「……」

その横をメグルはスタスタと通り過ぎて取調室を後にした。

（はぁ……この時間じゃ、もうスクープはおじやんだな……）

メグルは腕時計で時間を確認すると大きく溜め息を吐き、スクープを諦めて約束していた人物との待ち合わせ場所へと向かった。

（一応、来てはみたものの……アイツ、もう帰ってるだろうな……）

待ち合わせ場所の店まで後数メートルの所まで来ると、メグルは歩く速度を落とした。

「……あ、あのっ、及川さんっ」

すると、後ろからタマキが駆け寄って来た。

「え……、まだ何か……？」

その声にやや眉間に皺を寄せて振り返り、足を止めたメグル。

「い、いえ……あの、本当に大変申し訳ありませんでしたっ」

今までの強気な態度とは打って変わってとても弱々しい感じで深々と頭を下げて謝罪するタマキ。

「あ、あのー……そ、それで、そのー……お詫びといってはなんですが……今から食事でも……」

「別にいいよ。それに今から人と会う約束……て、言ってもまだ待ってるかどうかわかんないけど、とにかく……」

と、メグルとタマキが立ち話をしていると、

「メグ？」

目の前のダイニングバーから出て来た女性がメグルに声を掛けた。

「依子……」

それはメグルが約束をしていた相手であり恋人の常盤依子^{ときわよりこ}だった。

「……仕事で遅くなるって連絡しておいて、その子と遊んだの？」

少し冗談っぽい口調で言った依子。

「……………」

だが、メグルは何も否定しない。

その所為で依子はタマキの事を勘違いしてしまった。

「まさか、本当にそうだったの？ 最低」

声は荒げていないものの完全に怒ってしまったようだ。

メグルとタマキに背を向けてスタスタ歩き出す。

「え………… ちょ、あの………… つ、私………… 違いますっ」

タマキがハッとして否定しようとした時には既に遅く、依子はもう十数メートル先まで歩いて行っていた。

「どうして否定しないんですかっ？」

彼女を追い掛けようともせず、誤解を解こうともしないでいるメグルにタマキが向き直る。

「いいよ、別に」

「及川さんが追い掛けなら私が追い掛けて誤解を解いて来ます！」

「やめておいた方が良くと思うけど？」

「行つてきます！」

メグルが止めるのも聞かず、タマキは既に人ごみに紛れてしまった依子の後を追った。

「…………無駄だと思うけどなあ」

そんな彼女の後姿を見つめながらメグルは小さく溜め息を吐いた。

「あ、あのっ、待って下さいっ」

タマキはカツコツとヒールを小さく鳴らして歩く依子呼び止めた。

「……………」

怪訝な顔で振り向く依子。

「あのお…………何か誤解してらっしゃるようですけど…………私、及川さんとはなんでもないですよ?」

「……………」

「確かに及川さんが待ち合わせに遅れたのは私が原因です」

「……………」

タマキの話を無言で聞いている依子。

「実は……その……私が及川さんを誤認逮捕してしまって……それで今まで取調べを……」

「は？」

依子はあまりに突拍子もない理由に思わずそんな声が出た。

「だから、その……」

「あなた、誤魔化すならもう少しマシな嘘を吐けば？」

ばつが悪そうに言葉を続けるタマキに呆れたように依子が言う。

「え……」

タマキが言葉を詰まらせている間に再び歩き出す依子。

どつやらさらに怒らせてしまったようだ。

「あ……」

タマキは彼女を追い掛ける事が出来なかった。

（はぁ……今日は全然ついてないなぁ……誤認逮捕はしちゃうし、
及川さんの約束のお相手を、

誤解を解くどころかますます怒らせちゃうし……及川さんになん
て言えはいいんだろ……）

トボトボと引き返しながらタマキはメグルに対し、どう詫びようか
と考えた。

しかし、タマキがダイニングバーの前に戻ってみるとメグルの姿は
なかった。

「……あれ？ 及川さん？」

キョロキョロと辺りを見回してみる。

（いない……）

タマキは依子の誤解を解けなかったどころかさらに怒らせてしまった事を言わずに済んだ事にホッとすると同時に、

メグルの姿が消えてしまっていた事にがっくりと肩を落とし、深い溜め息を吐いたのだった。

「バカ野郎——っ!!」

署に戻ったタマキはいきなり怒鳴られていた。

誤認逮捕をしでかした上、とりあえずの謝罪だけしか出来なかったからだ。

“絶対に誤認逮捕の事が外部に漏れないように口止めをしろ”

そう上層部^{うへ}から言われて慌ててメグルを追いつけたのだ。

もちろん彼女自身、謝罪したいという気持ちがあったからあちこち走り回ってメグルの事を捜した。

そうして、ようやく見つけて謝罪と上層部^{うへ}から命じられたとおり食事^{うへ}に誘った。

だが、結果は食事にも誘えなかっただけでなく、彼と約束をしていた人物に誤解を与えた上、

怒らせてしまったのだ。

タマキはもう何をどう言い訳したとしても無駄だと思い、懇々と繰り返されるお説教をただじっと聞いていた。

一時間後、

タマキはようやくお説教から解放された。

「お疲れ」

自分のデスクに戻ると相方の是永が苦笑いしながら熱いコーヒーを

淹れてくれた。

「ありがとうございます……」

呟くように言ってカップに口をつけるタマキ。

「今回も始末書か？」

「いえ……しばらく様子を見るそうです……もし、誤認逮捕がマスコミにバレたら……始末書どころじゃ、

済まないかもです……」

「……そか」

「私……是永さんの足を引っ張ってばかりですね……」

「どうしてだ？」

「だって……私がいつもヘマをするからバディの是永さんまで評判悪くなっちゃうし……」

「でも、俺はお前の事、一度も足手纏いだとか迷惑だなんて思った事はないぞ?」

「どうしてですか?」

「“頑張ってる”からだよ」

「???」

是永の言葉の意味がわからず首を捻るタマキ。

「お前はまだ刑事としては新人だ。新人は男であれ女であれ、どんな職種であろうといろいろしかすもんなんだよ。」

それを上手くフォローしてやるのが俺達先輩の役目だと思ってる。

実際、俺だって新人の時は先輩達にたくさん助けて貰った」

是永は二十八歳のキャリア組。

二十歳のノンキャリア組のタマキとは立場がまるで違う。

それでも、警察学校から交通課を経て晴れて捜査一課へと異動が決まってから、ただがむしやらに仕事をこなしてきた。

だが、最初の一週間で当時コンビを組んでいた別の男性刑事からコンビ解消を言い渡された。

原因は女であるタマキが足手纏いだという理由だった。

そんな時、声を掛けてくれたのが是永だった。

元々は課長命令で決まった新バディだったが、

『男だとか女だとか、そんなの関係ない。俺は組みたいと思う奴と組む』

そう言っつて、是永はタマキに握手を求めた。

タマキはその手を握った。

是永の手はとても温かった。

「俺は今回の事で仮令マスコミにお前が叩かれるような事があったとしてもコンビを解消する気はない」

「え……っ」

タマキは思わず顔を上げた。

「最初に言っただろう？」「コンビを解消する時はどちらかが退職した時だって」

「は、はい……」

「明日、署長と一緒に及川さんの勤務先に一緒に謝罪に行こう。

誠意をもって及川さんに謝罪をすれば、彼だってきっとわかってくれるさ」

「はい」

「それじゃ、お疲れ」

是永はそう言つと軽く手を挙げて歸つて行つた。

「お疲れ様でした」

タマキはその後姿におじぎをした。
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3046ba/>

メグタマ！

2012年1月14日21時52分発行